

『過程の演習 新国語問題集』解説

11 山田詠美『晩年の子供』

「11」次の文章を読んで、後の問に答えよ。（筑波大）

私は、かつて晩年を迎えたことがある。この言い方は、いかにも奇妙だが、あの数カ月を、どのように形容すべきかと、ふと思う時、ああ、やはり晩年という言葉しかないと思うのだ。あの時、私は十歳だった。そして、残された日々をどうしたら良いのか途方に暮れていた。

始まりは、夏休みに伯母の家を両親に連れられて訪ねたことからである。暑い夏、私は、とても退屈していた。退屈は、いつも、私に色々なことを教えてくれる。私は、氷を入れた冷たいお茶のグラスの外側に水滴が付いて重みを増し、それらが流れ落ちて行く様子を見詰めたり、あまりの暑さに身動きも出来ない空気を悲しく思ったりすることに、毎日を費やしていた。伯母の家は、林に囲まれていて、私は、よく、その中を歩きまわった。そして、粉を吹き出すきのこや、小川のふちに群をなす糸とんぼに触れるのが好きだった。私は、決して、それを子供らしい好奇心から楽しんでたわけではない。私は、ただ退屈していたのだ。母は、私を好きなようにさせてくれた。彼女は久しぶりに会う姉とのおしゃべりに夢中で、私どころではなかった。父は伯父と碁盤をはさんで向かい合い、やはり、私には目もくれないかった。妹は従妹と子供らしい遊びに熱中していて、私を仲間はずれにしていた。私は、誰から見捨てられているという気分を存分に味わっていた。私は、そうされることが、時々、好きだった。つまり、私は、少しばかり、（1）風変わりな子供だったのだ。

私は、生き物の気配を感じたくなると、その家で飼われていた犬のチロの側に行った。と、言っても、もちろん、犬と遊ぶようなことはせず、ただ彼が尻っぽを振ったり、つながれたポーチの中を意味なく走り回ったりするのを見ていた。彼も、私が犬を可愛がる種類の人間でないことが解っていたので、じゃれつくようなことはなかった。彼は、暑さのせいで、いつも舌をだらりと伸ばして不愉快そうに息をしていた。チロは、色々なことを憎んでいるのかもしれないなあ。私は、麦茶を飲みながら、いつも、彼を見ていた。

ある日、いつものように、チロのところに行くと、彼は食事の最中だった。彼は、私のことなど見向きもせずに、一心不乱に私たちの昼食の残りのカレーライスを食べていた。それを見た瞬間、何故か、私の内に、彼に対する強烈なおしさが芽生えて来た。カレーライスを食べなければならないという立場に立たされた犬に、私は共感を覚えたのである。

「チロ」

私は彼の名を呼んだ。彼は、まったく私の声など聞こえないというように、音を立って食べ物咀嚼していた。私は、サンダルを履いてポーチに降りた。そして、食事の犬に近寄った。彼は、まだ、私の存在に気付いていない。チロ。私は、もう一度呼んだ。けれども、顔を上げようとしなかった。私は、チロの横にしゃがみ込み、

彼の頭を撫でた。私に頭を撫でられながら、彼は、ただ、ひたすらカレーライスを食べていた。ふと、彼は、食べるのを止めて顔を上げた。そして、愛情を込めた私の視線と自分のそれを交錯させた。一瞬、沈黙があった。私は、彼に微笑もうとした。彼は、それに応えるかのように少し笑った、と思ったのだが、その瞬間、私の手は彼に噛まれていた。私は驚いて、その場に尻餅をつき、慌てて無理矢理、自分の手を彼の口から引き抜いた。私は、まさか、彼に噛まれるとは予想もしていなかったもので、衝撃を受けて、尻餅をついたまま後ずさりした。チロは、そんな私を一瞥しただけで、再び、カレーライスを食べ始めた。

私は、よろよろと起き上がり、噛まれた手を押さえながら、家の中に入った。おそるおそる見ると手の平に二つ傷が出来ていて、血が流れていた。私は、唇を噛んで、庭のチロを見た。彼は、すっかりカレーライスをたいらげ、気持ち良さそうに、あくびをしていた。私は次第に噛まれた傷が痛み出すのを感じて、涙を浮かべながら、彼を見ていた。なんだか、（2）せつないような寂しいような気持ちに包まれていたが、犬を憎むような真似は出来なかった。私は、チロのためにも、このことは他言すまいと決意した。この家での彼の立場が、悪くなることを恐れたのである。

私は傷口を洗い、何事もなかったかのように、他の人々の前で振る舞った。誰も、チロに噛まれた私の衝撃を知る者はいなかった。皆、私をいつもどおりだと思っていた。その晩の夕食までは。

母と伯母が夕食の支度をしている間、私と、妹たちは、テレビの続き漫画を観ていた。少年忍者が、立ち向かって来る敵を倒しながら、ある大切な人を捜すために旅をするという漫画である。私たちは、夕食の前に、それを観るのを日課としていた。

その日、少年忍者は、犬に噛まれた。私は、驚き、目はテレビに釘付けになった。半年程、忍者は何事もなく旅を続ける。そして、突然、奇異な行動を取るようになる。川の水を直接顔を付けたまま、ぴちゃぴちゃと飲んだり、四つん這いになり走りまわったり、寒気や高熱にうなされながら、発狂して行くのである。その忍者の様子を静かに語り手が説明して行く。彼は、六カ月の潜伏期間を経て、発病した狂犬病によって死んで行くのだ。

「犬に噛まれると、狂犬病になっちゃうんだってー」

妹が、叫んだ。私は、自分の顔の血がすうっと下に降りて行くような気分を味わっていた。いつのまにか、チロに噛まれた手を隠すようにテーブルの下にもぐり込ませている自分に気付いた。

「ママー、犬に噛まれると狂犬病になって死んじゃうんだってー」

妹が、再び台所にいる母親に向かって叫んだ。私は、その瞬間、妹の髪を思いきり引つ張って怒鳴った。

「あんた、うるさいよ!!!」

妹は泣き出した。泣きたいのは私の方だった。母が台所から走って来た。

「どうしたの!？」

「お姉ちゃんが髪を引つ張った」

「どうして、そういうことするの! お姉さんのくせに」

私は、こらえ切れなくなつて、涙をこぼし始めた。母と妹は驚いたように私を見た。

私は、人前で、あまり涙を流したことがなかった。

「泣くことないでしょ」

母は慌てて、私をなだめようとした。けれど、もう止まらないのだった。私は声も上げずに、さめざめと泣き出した。子供らしい泣き方ではなかった。雨が、しとしとと降るような、本当に悲しい時の泣き方だった。事実、私は、その時、子供ではなかった。だって、晩年を迎えてしまったのだから。

その日から、私の日常は変わった。六ヵ月後に死を迎える人間としては、何をすべきであるのかを考えなくてはならなかった。私は、いつも、ひとりで、ぼんやりと悩んでいた。そうしている間にも、死期がせまっているかと思うと冷や汗をかいてしまう程だった。もうじき、発狂の前触れがある筈だ。私は、そう思い、いてもたってもいられなかった。それと同時に、チロが私に狂犬病をうつす筈はないと自分自身を安心させようと試みた。けれど、あの真夏にカレーライスを食べる犬を思い出しただけで、やはり、もう自分の体には、狂犬病が巣食っているような気がした。あの私と視線を合わせた時のチロの表情を思うと病気をうつされても仕方がないように思えた。

「ママ、私が死んだらどうする？」

私は、たびたび、そんな質問をするようになり母を恐がらせた。

「死ぬなんて言葉を口に出したりしたら、現実になっちゃうのよ。絶対に、そんなこと聞かないでちょうだい」

母の言葉に、私は、無言で首を横に振った。この人は、何も解っていない。私は、母を、いとおしく思った。

今度は妹に尋ねた。

「ねえ、お姉ちゃんが死んだら、どうする？」

「そしたら、去年の誕生日に。パパが買った熊の縫いぐるみちょうだいよ」

私は、うなだれて、自分の部屋に戻り、ひとりで、泣いた。孤独だった。

今度は、父にも尋ねてみた。

「パパ、私が死んだら、悲しい？」

父は、げらげら笑った。

「生と死について考えているのか。やあ、さすが、パパの娘だ。この年齢にして、すでに哲学か、いやあ、わっはっはっは、感心、感心」

哲学どころの話ではなかった。私は死につつあるのだ。もしかしたら狂犬病かもしれない。その不安は、死の接近について、考え続けている内に、はつきりと、私は狂犬病であるという確信に変わって行った。私は、六ヵ月後に死ぬ。この事実だけが、私の頭の中を駆け巡っていた。

私は、物憂い気分になりながら、季節の移り変わりを感じていた。死を意識してから、私のまわりにうごめくはつきりと形を持たないもの、たとえば、季節、たとえば時間、そういったものが、急速に姿を現し始めていた。色を持ち、意志を持ち、私に向かつて歩き始めていた。そして、周囲の人々、それは主に家族のことだが、彼らが私の周囲に形成する感情のモザイクのようなものが、まるで積み木のように重ねられていることも知った。彼らの私に対する感情には、まったく隙間がなかった。母の私

- 3/4 -

に対する思いを手でつまみ、空気の中から、一時的に外そうとすると、その空白を父や妹の感情の塊がおぎなひ、埋めるといふ感じだった。私は、初めて、(3) 家族が愛し合うことに、真空状態が存在しないことを知った。私の周囲は、濃密な他者からの愛で満たされていた。そして、幸福な人間は、そのことに気付くことがなく、そして、だからこそ幸福でいられるのだということに私は気付いた。幸福は、本来、無自覚の中にこそ存在するのだ。私は、父と母と妹を見て、つくづくそう感じた。その中で、私は、ひとり不安を背負い込んだ。自分が愛に包まれていると自覚してしまった子供ほど、不幸なものがあるだろうか。私は、目の奥の涙腺を縛り上げ、日常から涙を排斥することに全力を傾けた。泣いてしまうと、ますます、彼らの関心を引くことになる。私は、私が彼らの作り上げる空気の均衡を取っているのを改めて思い出すことにな。私は、なるべく、人々に衝撃を与えないように死にたいと心から願った。何事もなく日々が流れて行き、知らない内に、私だけが、彼らの中から抜け落ち、私の死など気付きもしないくらいに家族が幸福であること。私が望んだのは、そのことだった。

(山田詠美『晩年の子供』による)

問1 傍線部分(1)「風変わりな子供」とあるが、「私」は自分のどのような点が「風変わり」だと思っているのか、述べよ。【目安】110字

問2 傍線部分(2)「せつないような寂しいような気持ち」とあるが、なぜそのような気持ちになったのか、述べよ。【目安】110字

◎問3 傍線部分(3)「家族が愛し合うことに、真空状態が存在しない」とあるが、これはどのようなことか、述べよ。【目安】100字

問4 この文章において、なぜ「晩年」という言い方をしているのか、説明せよ。【目安】150字

- 4/4 -